

(2018年3月13日受稿 2018年6月20日受理)

## 【研究ノート】

# 〈可逆操作の高次化における大階層－階層－段階理論イメージ〉 図の作成の試み

吉留英雄

連絡先 E-mail : h-yositome@abeam.ocn.ne.jp

### はじめに

田中昌人（1932 - 2005）の理論は極めて難解である。しかし、田中ほど対人援助職として働く者にとって深い影響を与えた学者は数少ないといえる。このたび、田中の生涯をとおして追求した人間発達にかかわる理論について、筆者の力量の及ぶ範囲で図式化することを試みた。田中の理論は筆者にとってすべてが魅力的であり、つねに意識の中に明確に位置付けられている理論でもあるが、とくに、障害のある人たちとともに働き、活動するという現場においてまさに「人格の発達の基礎」<sup>1)</sup>という言葉に極めて重く受け止めてきた。そのため、無理を顧みず、田中の「対称性原理」にまで踏み込んだ図を作成することとした。

なぜ、そのような途方もなく困難な作業をすることとしたのかというと、田中の影響を受けた多数の人々がそう感じるように、田中の理論は魅力的であるが難解である。正しく読み込むことができているのか、不安に襲われることも度々ある<sup>2)</sup>。しかし、同じ思いを持っているであろう多くの人々に対して、田中の著した理論のイメージ図を提供することにより、より田中の理論をわかりやすく届けることができるので

はないかというのが筆者の思いである。

そうはいつでも、筆者の力量には極めて大きな制約があることは確かである。図についても筆者の及ぶことのできない点については表すことができなかつたし、逆に筆者なりの独特の理解を図に書き加えたという点もある。あえていうならば、田中の理論を学び、対人援助職の具体的な仕事に生かすために、ある程度のわかりやすい指針となるものを提供することができればというのが筆者の思いである。とともに、筆者の力の及ばない点も多数あることと確信している。その点については本図を公表することによって広く批判をうけたいし、そのうえで筆者自身の学びが深まることを願っている。

### 1. 発達保障論と実践的危機に直面して

(1) 発達保障論を確かめていきたいと考えたきっかけ——田中の理論の図解を試みるまで——

田中は生前、極めて精力的に各地で講演を行い、現場の実践者への励ましを送り続けていた。筆者も現場の実践者として田中の講演を聞き、多くの教えをいただいた。とくに大阪保育問題研究所の連続発達講座では『子どもの発達と診断』をテキストとして、実践者にとってわ

かりやすく語りかけていたことを覚えている。当日配布されたレジュメには筆者の多くの書き込みがあり、テキストとして用いられた『子どもの発達と診断』はその後の再学習の中で、自らの追い求めているものを確認するがためにぼろぼろの状態になるほど読み込み続けた。つまり実践者としての筆者自らのあゆみは田中の「理論」の裏付けを欲していたし、実践的にも多くのヒントをいただいたと感じている。

これほどつよく自らに影響を与えた心理学者は存在しないし、実践の柱建てとして用いる財産を与えられたと感じている。しかし、例えば次のような例をとって考えるとどうであろうか。

「1次元可逆操作を獲得すると、3つの発達の自由がみられます。第1に、直立2足歩行による移動の自由、言語による表現の自由、そして手による道具の操作の自由です」<sup>3)</sup>

この話を受講者として聞いていた筆者は、多分田中としては前後、何らかの説明はあったとしても、聞き逃して、「～歳になれば、どうなる」という部分だけ、都合よく学び取っていたともいえる。また、「反抗期」に入った子どもが靴下をはくのを嫌がったとき、別の靴下を持ち出して、「どっちの靴下にする?」とか、「どっちのあんよから履く?」<sup>4)</sup>というような、自我の営みの〈焦点ずらし〉ともいえる技法が頭に残っている。この「選択」を用いた実践は現場では常にみられていた。当時幼児期の子どもたちと過ごす現場にいた筆者にとって「～歳になれば何ができる」、子どもとのやり取りで困ったときには選択を入れるという手法が田中の講演での具体的な解説の中での一場面として残っているのである。このことは実践現場において決して無駄なこと（知識）ではなく、保育者としての一つの大きな手がかりであったのは確かである。しかし、逆にそれだけでいい

のかという疑問は残されていた<sup>5)</sup>。つまり、そういった保育実践における手技を田中は理論的に展開しようとしたのではなく、その背景にある例えば「自我の誕生-拡大-充実」そしてそういう営みが発生するダイナミズム（「ダイナミックな法則性」）、またその基底に脈々と連なる人格的基礎の形成にかかわる法則（「美しき法則性」）の理解の上に立ち、あるいはそれにかかわる批判的なまなざしを持った実践をすすめるために、田中の理論そのもののありようを筆者の力量の及ぶ範囲にて表現する必要を感じたわけである。

その後筆者は長年、幼児教育の現場を離れ、成人期の障害のある人たちとともに働くこととなった。私たちの仕事の大切なものはと問われたときに、常にかたられてきたのが「発達の保障」という用語でもあった。しかし、自らの仕事の定義をするための一つの「手段」としての「発達」でもあり、日ごろの実践では「発達」という視点は頭の隅からも離れていたといってもよい状況であった。近畿地方、しかも京都、滋賀からは極めて近い大阪で働く私としては、「必要になったらいつでも学ぶことができる」という極めて安易な気持ちで過ごしていたが、そのなかで10年以上を過ごす中で、私たちの仕事の軸となるべき「発達」「発達保障」についてあまりにも貧弱な理解のまま仕事をしていてもよいのかという自問自答がはじまった。年齢40歳を超えてからのことである。現場でも障害のあるなかまたちの悩ましい行動に頭を痛めていたこともあり、今のままでいいのかという焦りの念がわいてきたのもこのころであった。「いいよ、何とかなるよ」と楽観できる状況ではなかったのである。

また、政治的にも大きな転換期を迎えつつあった<sup>6)</sup>。対人援助職という人権を骨格とした仕事が発利目的のサービス業へと強引に変質さ

せられつつあったということもある。職場では露骨に、「これまではこの人にこうなってほしいとか、～ができるようにという見方でかわわってきましたが、これからは、それぞれの人が満足しているのか、要求を充足されているのがものさしとなります」と、平然と説明がなされた。措置費制度から支援費制度へと移行する中での出来事である。教育的なかかわりも否定され、「説得」はなかまの自己決定権を侵害するゆえに避けるべきであり「相談」あるいは「同意」が優先されるものだ。本人の「選択」は決して冒してはならず、それに対する介入は人権侵害であるということさえ指示されていた。実践現場の中核自体が、職員もなかまともに悩み育ちあうという「発達保障」というこれまで値打ちとして語ってきたものをあたかも軽いチラシのように投げ捨てた瞬間でもあった。私がまじめに「発達」あるいは「発達保障」についてしっかりと学ばなければ時代の流れにのまれてしまうという危機感を覚えたのは当然のことであり、そのころから人間発達研究所とのつながりが生まれた。

人間発達研究所の講座や発達保障学校に毎年通うこととなったのも確かこのころからである。ここでは多くの学びがあった。ただ、これまで私の行ってきた実践の確認であったり、テキストの読解であったり、解説であったり、田中の理論への接近は実感できたのであるが、本質への理解には程遠い状況でもあった。知識としては頭の中に次々と入ってくる。しかし、真に体系的にそれを理解することができてはいない。そういう焦りが生じてきたのは、筆者のこだわりであろうか？ しかし、ともにゼミに参加する実践者が、筆者も含めて消化不良のままになっていること、若き学生、院生の皆さんが、体系的な理論を獲得することなく、子ども研究に向き合っていることがあるかもしれな

い。ゼミでの議論に加わる中でそういう心配も生じてきた。

筆者自らもそうであるが、真剣に時代の誤った流れに抗して、真理真実に裏付けられた発達理論を学びたいという要求を持つ現場実践者は相当の数に上るのではと思っている。しかし、田中の理論は難解であるとともに、時代とともに概念自体が改訂を繰り返してきた<sup>7)</sup>。具体的には、『人間発達の科学』（以後、『科学』と略記する）にはじまり、『子どもの発達と診断』5分冊（以後、『診断』と略記する）、『人間発達の理論』（以後、『理論』と略記する）、そしてその後の研究はまさに“知る人ぞ知る”であるが、次々と新しい概念が積み重ねられ、古い概念は捨象、あるいは否定されの繰り返しの中で書き綴られてきた。しかし、それぞれの著書と向き合う実践者としては、田中の理論の全体において、どのあたりを今、学んでいるのか、確認したいと思っているのではないか。筆者自身でいえば、そういう思いが強く募ってきたのも事実である。私はこれら3つの著作を田中の主要3部作<sup>8)</sup>とするが、もしかすると、視覚的に表現しなおすことができれば、理解も深まるのではないかという思いから、図として書き記してみることにした。

## （2）大階層－階層－段階理論イメージ図を作成してみる

田中の代表的なこの3部作を一つの図にしてまとめるということは、本当のところきわめて重要な点で無理がある。大体、前述したように、時代によって概念自体が新たに塗り替えられてきた、あるいはかつての用語の否定さえあり弁証法的に発展してきた田中の理論そのものを、そういう時間を捨象して一つの図にまとめるなど、とんでもないことかもしれない。また、一つの図にまとめたとしても、一つ一つの

概念自体の解釈に誤りがあるかもしれない<sup>9)</sup>。例えば『科学』では「新しい交通の手段が生成する」ないしは各階層－段階における特徴において、「可逆交通する」と言い切られていたものが、『診断』と『理論』では「新しい交流の手段と発達の自由の増大」となる。『科学』における表（表5「回転可逆操作の高次化の説明」、表6「連結可逆操作の高次化の説明」及び表7「次元可逆操作の高次化の説明」、いずれも1976年<sup>10)</sup>）では、随所にこの「交通」が表現されていたが、『理論』における図（図1「発達の階層－段階と発達保障の階梯」1987年）では階層間の移行時にのみ用いられている<sup>11)</sup>。田中自身、自ら作成した図を次々と新たなものへと書き換えつつ、概念自体も整理しなおすという作業を途方もなく繰り返していたに違いない。しかし、あえて、そういう時間軸を捨象し、その危険を冒しても、筆者自身の田中理解を確認し、批判あるいは多方面からのご教示を受けるつもりで作成したのが、本稿でこれから示す「可逆操作の高次化における大階層－階層－段階理論イメージ図」である。主に田中の3部作を筆者の理解のできる枠内で、図に移し替えただけ（移し替えただけとは言いつつ、言い過ぎかもしれない。移し替えの時に表記に誤りがあることも予想できる）ともいえる。ただ、その図の主に骨格として参考としたのは『理論』第1部第4章「発達における対称性原理について」と、本稿で示した下記の図1である。その文脈を骨格とした図の上に、各著作に示されている事柄がどのように位置づくのかという点で書き記してみた（図2、図3）。田中自身、各々の時期に自らの理論にかかわる図は作成しているが、整然とした図（あるいは表）でもあり、何がどこにつながり、どのような機序でどうあられるのか、対応する表記がなく、不明である。その点を補い、「わかりやす

く」しようとしたものが本稿の図2、図3である。

### （3）図の土台となった人間発達研究所発達保障学校での学び

筆者にとって、いざ図に展開してみようとしたときにベースとなるものがある。それは、人間発達研究所、発達保障学校の『発達基礎理論コース』における荒木穂積講師の板書である。これは、『科学』第2部「第2章 発達の弁証法における矛盾」<sup>12)</sup>の解説において示されたものである。筆者のメモと記憶をたどって再現したものが次頁の図1である。形成期と可逆操作期がジグザグの線で結ばれ、極めてシンプルな形で表現された。また、可逆操作力と可逆操作関係についてもそのずれが簡潔に表現されている。

原著論文、特に『科学』第2部第2章を読んでいて全く歯が立たないという感があったが、この板書を見ることで、人間の発達における「可逆操作関係」と「可逆操作力」の関係が、目から鱗が落ちるように鮮明となった。そのように筆者には思えた。「可逆操作関係」と「可逆操作力」は、各階層の発達段階の形成期と可逆操作期において関係は異なり、各段階の形成期においては変数が「可逆操作力」のものが「可逆操作関係」のものより一つ上回る。ここにおいて田中は「系列」という表現をしている。各段階の可逆操作期においては、「可逆操作力」と「可逆操作関係」の変数は同一であり、田中は「並列」という用語を用いている<sup>13)</sup>。前者つまり、変数が異なる場合、変数の高い「可逆操作力」にとって「可逆操作関係」は桎梏となる。

このように、極めてシンプルな図ではあるが、田中の「階層－段階理論」のありようを示した重要なものだと感じた私は、この図1に田

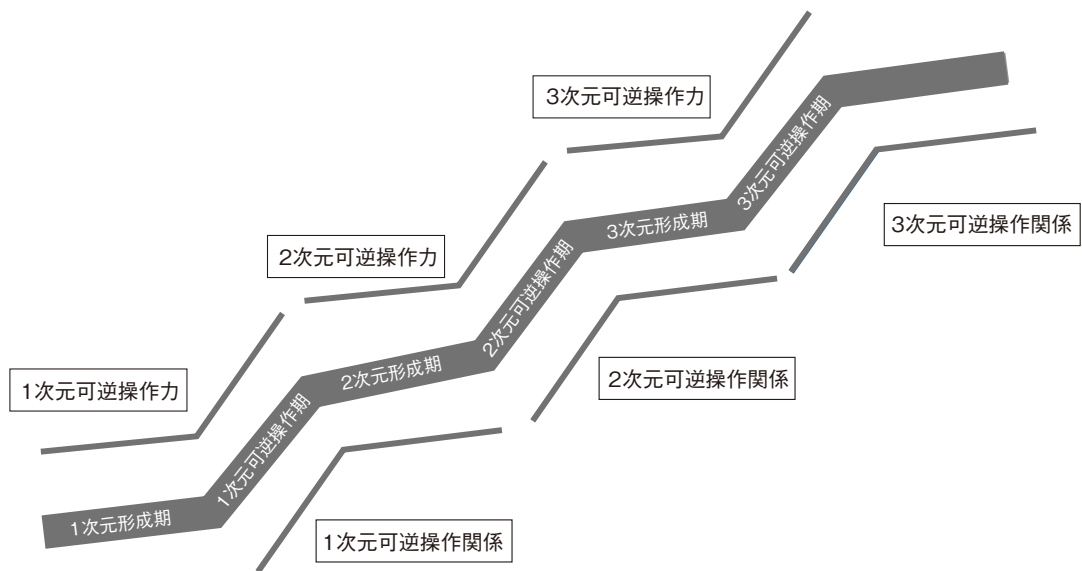


図1 可逆操作力と可逆操作関係の存在様式

中の3部作に表現されているもろもろの事象を位置づけ、表現しようとしたのが図2、図3である。次に、論旨の展開としては大きく飛躍してしまうが、田中の晩年の発達の存在様式の表現である、「大階層－階層－段階理論」にかかわって、作図してみた(図2)。

#### (4) 〈密着〉、〈充実〉、〈対象化〉<sup>14)</sup> を考えた背景

筆者がこの図を作成した時に最も脳裏にあったものは、各階層の1、2、3の各段階は単に順序的に並べたものではなく、それぞれが特徴を持っているということである。つまり、1、2、3というのは量の問題ではなく、質の問題を表現しているといえる。田中は自ら座談会で次のように述べている。

「1つの発達の階層の中に3つの可逆操作の段階があって、第1の段階はまだたいへん矛盾に満ちたその階層の特徴が十分表れていない不自由な発達の自由を特徴とし、第2の段階は先の生理的な制約から脱却してその階層のもっともその階層らしい特徴を活発に表して伸びゆく

自由が発揮される時期であり、第3の段階は、それがさまざまな機能と連関して、連関の自由という特徴をもった現れ方をしていきます」<sup>15)</sup>。

乳児期前半、後半、そして幼児期、学童期、それに続く時期時期に応じて階層はあり、それぞれの階層には、その階層をもっとも代表する姿のみられる時期があるということである。

〈密着〉とは、自らのもっている諸力量が、獲得されて間もないころの姿であり、しかも獲得はしているが、わが腕(かいな)で使いこなすことができず、手に余る状況で自らにまわりついていて、いまだ自由には使いこなせていない状況ではないかと筆者は考える。例えてみれば、暴れ馬をわがものとして獲得しても、それを自由に操ることができない。馬にしがみつくのが精いっぱいの状態として理解してもいいのではと考える。そして、〈充実〉を迎える。この充実とは、獲得した諸力量を我が腕で使いこなすことのできる姿ともいえる。暴れ馬を上手に乗りこなす、自由に操作できる状態になったともいえよう。つまり、その階層における特徴的な発達の自由が全面的にわがものとな

り、充実していくのである。

そして、その前後の形成期、つまりたとえば回転軸2形成期への移行期、回転軸3形成期への移行期に、前者は発達の「内への破れ」、後者は発達の「外への破れ」が見られるということ。このことは、先に記したそれぞれの階層の階層らしい姿という表現とも重なってくる。つまり、まず、「内への破れ」により、その階層の主人公としての大文字で書くIがあらわれ<sup>16)</sup>、人との関係やモノとの関係を含む、もろもろの外部の状況と本人の内面との葛藤の後に、他者との関係において自らが主人公として新しい発達の力を駆使するすべを獲得していく。あるいはモノとの関係でもそうである。他者との関係は、こういうふうには、幼児期において〈主人公性〉<sup>17)</sup>がもっともわかりやすくあらわれると考える。通常、社会福祉の現場にあっては、子どもたちはあるいは成人期の知的障害のある人たちは、集団の中で活動する。そしてこの集団の過程の中で、発達につながる栄養が自らの中に蓄えられていく。民主的あるいは意図的に組織された集団や周りの人たちの援助の中で、あるいは自らのもっている諸力量を駆使して矛盾をのりこえていく。また、内面的にももろもろの葛藤が生まれ、それらを克服していく努力の中において、つまり、発達の源泉を主体的にわがものとしていく営みの成立条件がこの発達の「内への破れ」ではないか、ということである。田中は『理論』において人格の発達の基礎の形成の時期にこの、「内への破れ」を当てはめているのはそういうわけで必然であると考え。そして、第2の発達の段階つまり、〈充実〉の時期、その階層の活動が次々と形成され、人間関係もモノとの関係も大いに蓄積され、発達の原動力の源泉部分となるさまざまな経験や活動が大いにわがものとされていくわけである。

やがて、自らのしていることを客観的なものとして、語らずにおられない、あるいは冷静に「外から」見つめるという状況が生まれる。あたかも暴れ馬を乗りこなす自らの状況を客観的にとらえることができる、あるいは暴れ馬の乗り方を他者に伝えることができるという時期であるといってもいい。あるいは、対等平等な対人関係において、他者に対して主導的な役割を果たしたいという願いが生じてくる。いわば、外界へと働きかけるとともに自らをも変えていくという2重の生産機制が特に強く働く時期である。そのねがいや思いが最大限に膨らんだ時に、発達の「外への破れ」<sup>18)</sup>が生じることとなる。つまり、自らのしていることを客観視すること、あるいは自らと他者との関係を客観視することが可能となるのである。

特に強く二重の生産がおこなわれると記したが、次のとおりである。一つはその階層の総括の生産であり、もう一つは次の階層への発達の原動力の誕生である。このときに「新しい交流の手段」が発現する<sup>19)</sup>。そういうイメージを、筆者は持っているわけである。そしてここで誕生した「新しい交流の手段」が「可逆操作力」との間で〈相互浸透〉を繰り返しつつ、より豊かとなり、次の階層において、この「新しい交流の手段」が内へと破れることにより、次の階層の〈主人公性〉を獲得することに結びつくという理解である。

以上の説明から、各階層の第1の発達段階は、特徴としてその階層の主人公として、いまだ十分に自分自身や新しく獲得した力を自由にコントロールできない状況、新たに獲得した発達のな特徴を持つ力が自らに〈密着〉した状態で存在するが、〈密着〉しているがゆえにその力を対象化してわが腕で使いこなすことができない状態であるがために、この第1の発達の段階を〈密着〉とあえて呼ぶこととした。そして

第2の発達の段階は「新しい交流の手段」が内へと破れることにより、文字通り、自らが主人公として「新しい発達の力」をもって外界に働きかけ、自らも変化させていくという2重の生産過程を経ることにより、発達の源泉を育て充実させていくという意味で、〈充実〉とあえて呼ぶこととした。そして最後に、第3の発達段階は、第2の発達段階で十二分に活動し自ら、あるいは自らと外界との相互関係について客観視することができるという意味で、それを〈対象化〉として呼ぶこととした。

つまり、〈密着－充実－対象化〉の3つの過程に対応して、1, 2, 3の発達段階があるのであり、単に量としてではなく質としての発達に着目したものであるといえる。ただここで十分に留意すべきは、決して量を軽く見てはいけないということであり、質が変わることによって量そのもの、つまり生産機制自体も大きく変わるということである。そしてこの生産機制がその時期の発達関係では成立し得なくなった時つまり、共存できなくなった時に、次への階層への飛躍的移行が行われるのである。

## 2. 図2の細部にわたる説明

図2は、大きくは上記のような観点から描いたものであるが、多様な補助線や記号がちりばめられていて極めて分かりづらいものとなってしまった。この点について、図2の構成と細部についての説明を加えることとする。

まず、図2のちょうど真ん中をジグザグに左下から右上へと伸びている薄い実線は、図1における中心を走る可逆操作期と形成期の交代を含む図の中心となるジグザグの太い実線に相当するものである。「形成期」と「可逆操作期」を区別する意味でジグザグにしたわけである。極めて重要な線ではあるが、図、全体をわかり

やすくするためにあえて薄く表現した。

次に、それらを貫き通すようにしなやかにまがった曲線がやはり左下から右上へと伸びている。白抜きと黒塗りの交互の繰り返しの曲線となっている<sup>20)</sup>。この中で、白塗りの部分は対称性原理にあつては「内への破れ」の時期にあたる。つまり、〈主人公性〉を発揮する時期である。逆に黒塗りの部分は「外への破れ」の時期にあたり、各階層の3形成期から次の階層の2形成期までの時期に相当する。自己を客観化し、あるいはヒトやモノとの関係を客観的に見つめることのできる時期から、新しい発達の力をわが腕の内に収めるまでの時期に相当する。特にこの時期の後半部分は対称性原理の展開の第1, 第2の展開がみられ、「人格の発達の基礎」の培われる時期ともなる。

また、各々の白塗りの部分から黒塗りの部分へと移る時期に星印が記されている。この星印は新しい発達の力の誕生として記した。筆者のこの時期のイメージは、それまで内にため続けてきた発達の力がそれまでの発達関係の桎梏を打ち破るかの如く爆発的に外に飛び出るといったものがあるために、このような表現となった。そして、この星印から上記の如く、飛び出た力が新しい発達の力であり、次の発達の階層における「発達力」の誕生として表現した。「人格の発達力と発達関係の矛盾」<sup>21)</sup>と『科学』では記されているが、各階層にはそれぞれに見合った「発達力」と「発達関係」が存在するというを前提にして、各々の階層にそれらを位置付けてみた。

ではなぜ、この「発達力」と「発達関係」の実線が折れ曲がっているのかということであるが、これは筆者の理解であり、田中自身は言及してはいないが、先に記したとおり、「発達力」は各階層の第2の段階の時に、その階層の最も階層らしい姿を示すものであり、この時期

人格の発達力と発達関係の矛盾の生成・発展・消滅のながれについて、大階層のイメージからまとめたものである。

大階層の中の第1の階層は密着として、第2の階層は充実として、第3の階層はそれまでの二つの階層とは違った、社会や人間関係や自分の生き方を客観的にとらえることから、対象化として見た。

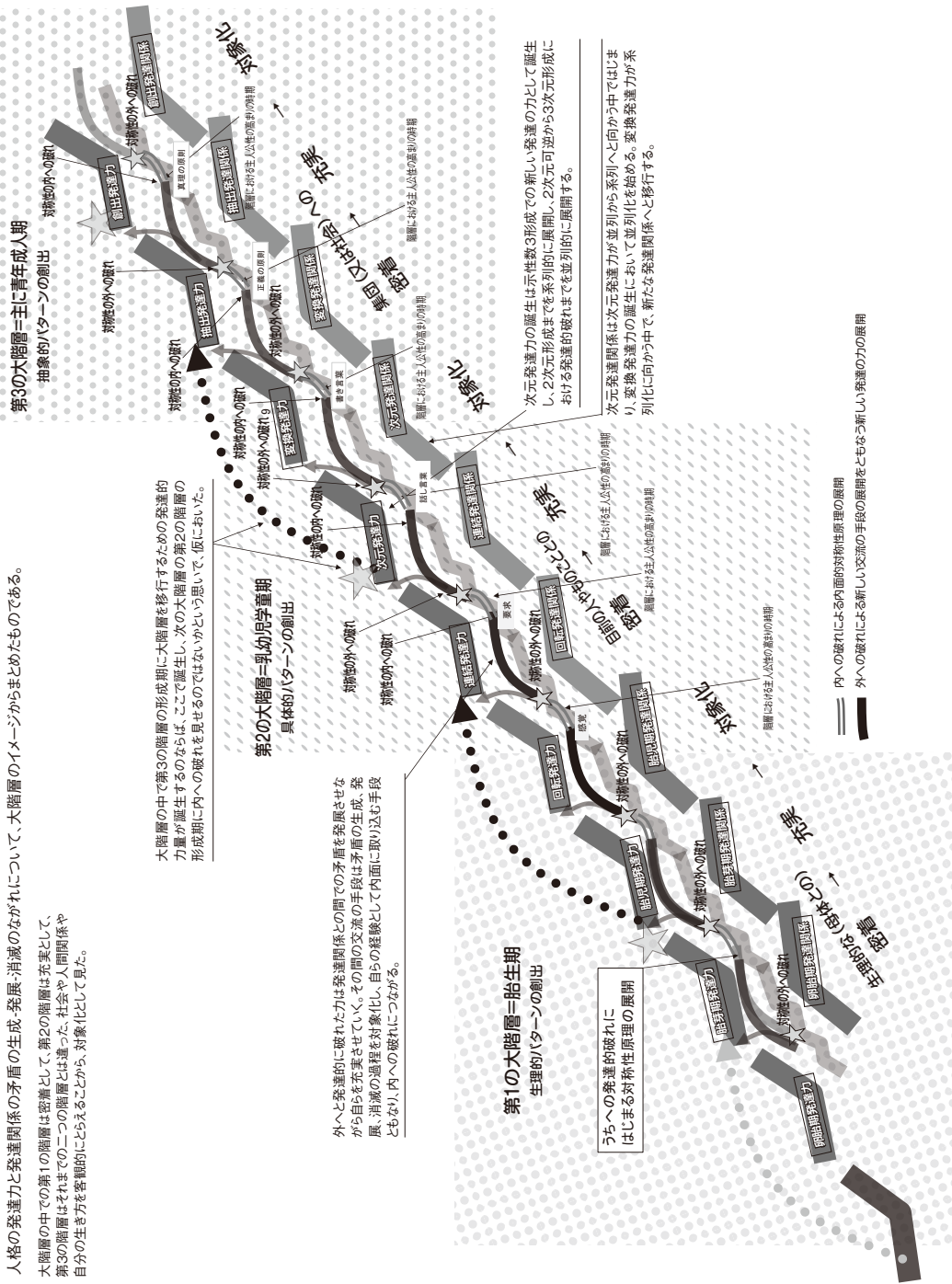
大階層の中で第3の階層の形成期に大階層を移行するための発達の力量が誕生するのならば、次の大階層の第2の階層の形成期に内への破れを見せるのではないかという思いで、仮にしていた。

### 第2の大階層＝乳幼児学童期 具体的パターンの創出

外へと発達の破れた力は発達関係との間での矛盾を克服させながら自らを充実させていく、その間の交流の手段は矛盾の生成・発展・消滅の過程を対象化し、自らの経験として内面に取り込む手段ともなり、内への破れにつながる。

### 第1の大階層＝胎生期 生理的パターンの創出

うちへの発達の破れにはじまる対称性原理の展開



### 第3の大階層＝主に青年成人期 抽象的パターンの創出

次元発達力の誕生は示性数3形成での新しい発達力として誕生し、2次元形成までを系列的に展開し、2次元可逆から3次元形成における発達の破れまでを並列的に展開する。

次元発達関係は次元発達力が並列から系列へと向かう中で始まり、変換発達力の誕生において並列化を始める。変換発達力が系列化に向かう中で、新たな発達関係へと移行する。

== 内への破れによる内面的対称性原理の展開  
—— 外への破れによる新しい交流の手段の展開をともなう新しい発達力の展開

図2 可逆操作の高次元における大階層・階層・段階理論イメージ



に急激に高まりを見せるというイメージを筆者は持っているからである。またこの時期に初めてこの時期の「発達関係」が誕生することがその加速度的な「発達力」の増大の前提ともなっているというイメージを筆者は持っている。『科学』の表9<sup>22)</sup>にあるように、各々の「発達力」の誕生から次の「発達力」の誕生までを「教育階梯」の一つのまとまりとしていることにも注目したい。また、「発達関係」の折れ線部は「再学習の階梯」のはじまりにあたるとした。

いちばん外側に飛び出た破線は、大階層についての筆者のイメージを表現したものである。田中自身はこのことについてはもちろん触れてはいないので、あくまでも筆者の推測である。よって、実線ではなく破線で表現した。

まず、破線のはじまりに見られる大きな星は何を意味するのかについて述べてみたい。筆者の感じるどころ、各階層においてもっともその階層らしい発達の段階があるように、大階層においてもそういう大階層を代表するような階層が存在するのではないかという仮説に基づく。このことは、各大階層における発達力の誕生と強く結びついていると考えている。このことを大きな星印をもって表現してみたのである。

「対称性原理」における「内への破れ」は破線で表現したように、大階層においても見られるはずであるという筆者の仮説につながっている。つまり、「階層－段階理論」でそうであったように、第3の発達段階の形成期に至ったときにあたらしい発達の力が誕生することは田中自身繰り返し述べてきている。では、「大階層」においてはどうかというのが筆者の率直な関心点なのである。この点については諸氏のご批判を仰ぎたいが、第2の階層はその大階層の最もその大階層らしい姿を表現する階層ではないかということである。

「階層－段階理論」において新しい力の誕生の時、各階層の第3の発達段階の形成期に、一つは次の発達の段階への移行の力が誕生するとともに、次の階層にいたるための力も誕生するが、大階層間の移行にあたっては、同様の仕組みがあるはずだということである。そのための前提となる源泉は第2の階層において十分に蓄えられていく。その第2の階層における特徴的な性質つまり、〈主人公性〉は次の大階層における発達における第1の階層から第2の階層への移行期に、人格的基礎としての〈主人公性〉の誕生に連なるという考えである。

いいかえれば、先の大階層における〈主人公性〉が次の大階層において〈主人公性〉として新たに生まれ変わるには、次の大階層において第1の階層から第2の階層への移行期に発達の「内への破れ」が求められるし、その前提として前の大階層において〈主人公性〉を大いに発揮したうえで、第2の階層から第3の階層への移行期において次の大階層への発達力の誕生が行われるというイメージである。つまり〈主人公性〉の新たな生まれ変わりが人の発達を促していくのではないかと考えているのである。よって、破線の終点には「発達の内への破れ」の瞬間があるし、それを促すものが新しい発達の原動力の誕生の時に同時に外に破れた〈主人公性〉だということである<sup>23)</sup>。

### 3. 特に対称性原理の具体的な展開について

人間発達研究所での学びを深めるために、2008年の晩夏のころ筆者はわが子の毎朝のお着換えの時、VTRを撮り続けた。単に着替えだけではなく乳児期前半であったために、追視の試行を行った。〈密着体制〉の時期は原始反射に支配され、自らの動きは極めて制限的である。ほぼすべての活動が刺激と反射によって起

こされているといってもよい。ちょうど2か月に入っところは追視も反射的追視であった。つまり、目の前で動くものに対して自発的ではなく、受動的に追視させられてしまうということであった。左右45度、合計90度の追視の時期である。それが一時期、2か月目の後半になると、追視が消失してしまった。つまり、反射的追視が消失したのである。続いてすぐに現れたのが、左右90度、合計180度の追視である。〈反射的追視〉あるいは〈受動的追視〉は消失したが、次は見たいものを見るという風に〈能動的追視〉がはじまったのである。

このことを筆者は〈主人公性の獲得〉として表現したが、いかがであろうか。3か月目になると、あやされて大喜びをして笑うようになった。人との関係性が生まれてきたのである。以上の過程を総括すれば、〈受動的反射〉による追視の時期を〈密着〉、そして〈積極的追視〉の時期を〈充実〉として呼ぶことができよう。やがて、そういった活動、モノや人との関係の中で十分に経験を積み重ねた結果、見たいものを見せろと要求し、人との関係ではあやしてくれとせがむようになった。このことは、この階層に置かれた自らの状況を把握し、モノとの関係、人との関係を客観視することができたといえる。つまり自らの置かれている状況を客観的にとらえ、外界との関係をも対象化するという、〈対象化〉へと移行したといえる。

以上、具体的な例を出したが、発達の源泉の形成、発達の原動力の生成を科学的に分けて考えるとき、3つの発達段階の各階層における役割を改めて考えるに、対称性原理はその裏付けとして重要な位置を占めているといえる。なぜならば、対称性原理は人格の発達の基礎にかかわる原理であり、「内への破れ」、「外への破れ」を繰り返しつつ螺旋型につらなりながら発達していくものであり、人間の発達において

もっとも深部にあり、一貫して途切れることなくつながる原理だからである。とともに、具体的な例を示すと次のようになる。障害のある人たちとともに働き活動する中で実践的に感じていることは、Aさんにとって今、対称性原理はどのように働いているのか、内へ破れた段階にあり、内面を豊かにする働きをしているのか、あるいは外に破れた段階にあり、他者あるいは自分自身を俯瞰的にみることのできる段階にあって、豊かさを獲得している時に至っているのかについて、筆者は注視してきた。いずれにしても人格の発達の基礎を説明する原理として極めて有効でありかつ重要であると感じているのはそういう事情にもよる。

このことは生後第2、第3の発達の階層においても観察することができる。主人公性の獲得が発達の源泉をつかみ取る腕をつくりその時期の発達関係では両立し得なくなった時にそれは破れて発達の原動力として生成してくるという営みである。

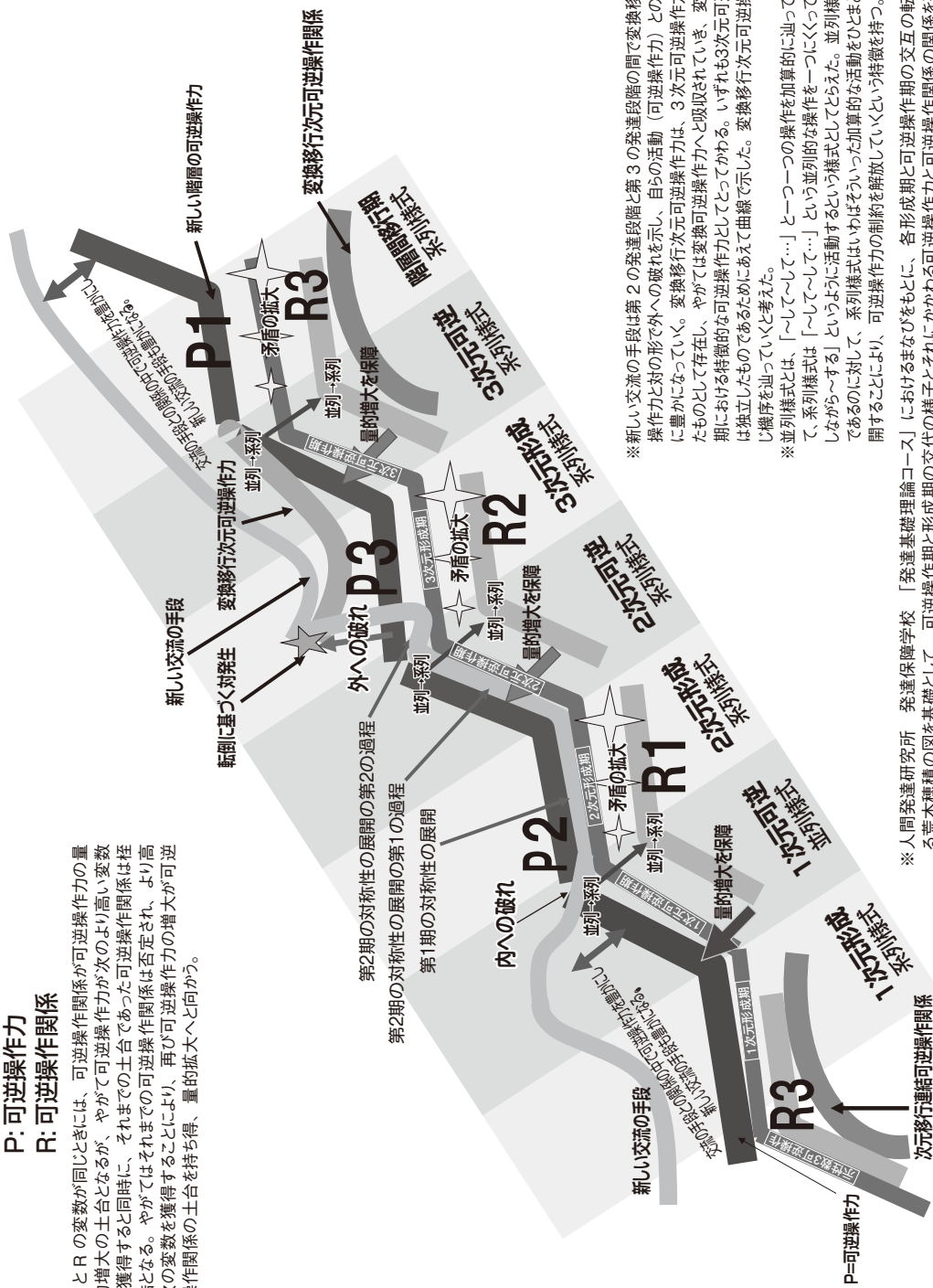
このことを、図では表記の濃淡で、〈密着〉、〈充実〉、そして〈対象化〉の時期を分けて表現したが、ちょうどこの対称性原理を表現する線（黒塗りと白塗りが交互に現れる線）がらせん状になってあらわれていることにも注目したいと考えている。

#### 4. 次元可逆操作の階層における対称性原理の展開のイメージについて（図3）

田中は「理論」の「発達における対称性原理について」において、とりわけ詳しく触れているのがこの次元可逆操作の階層である<sup>24)</sup>。キーとなるのが、静かな法則性の中では、「可逆操作力」と「可逆操作関係」の矛盾<sup>25)</sup>、「系列」様式と「並列」様式の交代<sup>26)</sup>である。ダイナミックな法則性にあっては、特に「転倒に基づ

**P: 可逆操作力**  
**R: 可逆操作関係**

PとRの変数が同じときには、可逆操作関係が可逆操作力の量的増大の土台となるが、やがて可逆操作力が次のより高い変数を獲得すると同時に、それまでの土台であった可逆操作関係は桎梏となる。やがてはそれまでの可逆操作関係は否定され、より高次の変数を獲得することにより、再び可逆操作力の増大が可逆操作関係の土台を持ち得、量的拡大へと向かう。



※新しい交流の手段は第2の発達段階と第3の発達段階の間で変換移行次元可逆操作力と対の形で外への破れを示し、目らの活動（可逆操作力）との関係で相互に豊かになっていく。変換移行次元可逆操作力は、3次元可逆操作力とは独立したものである。やがては変換可逆操作力へと吸収されていき、変換可逆操作力期における特徴的な可逆操作力としてとってかわる。いずれも3次元可逆操作力とは独立したものであるためにあえて曲線を示した。変換移行次元可逆操作関係も同じ順序を辿っていくと考えた。

※並列様式とは、「～して～して…」と一つ一つの操作を加算的に辿っていくのに対して、系列様式は「～して～して…」という並列的な操作を一つにくっつけてまとめて「～しながら～する」というように活動するという様式としてとらえた。並列様式は加算的であるのに対して、系列様式はいわばそらういった加算的な活動をひとまとめにして展開することにより、可逆操作力の制約を解放していくという特徴を持つ。

※人間発達研究所 発達保障学校「発達基礎理論コース」におけるまなびをもとに、各形成期と可逆操作期と可逆操作力の交互の転換にかかわる荒木穂積の図を基礎として、可逆操作期と形成期の交代の様子とそれにかかわる可逆操作力と可逆操作関係の関係を整理した。

図3 次元可逆操作の階層における可逆操作力と可逆操作関係の対応図

く変換移行次元可逆操作関係」<sup>27)</sup>の誕生とともに、「新しい交流の手段」の発生<sup>28)</sup>である。また、対称性原理にあつては、「第1期の対称性の展開」「第2期の対称性の第1の過程」および、対称性の「第2期の対称性の第2の過程」,「新しい交流の手段」の「内への破れ」がキーとして挙げることができる<sup>29)</sup>。それぞれの時期におけるこれらキーとなる概念の動的イメージを示したものが図3である。

この中で、「新しい交流の手段」を伴う「可逆操作力」の営み中で「交流の手段」も「可逆操作力」も、それぞれが豊かになり、力強くなっていくことにより、ついには「新しい交流の手段」の一つである言語（あるいは思考）が「可逆操作力」において強い影響をもたらす中で、〈主人公性〉が生まれ、「人格的発達の基礎」が爆発的に大きくなりつつ、「2次元可逆操作力」の誕生を実現するというのが、図3における筆者のイメージである。主には図3の左半分をその表現に充ててみた。この関係については「回転可逆操作の階層」「連結可逆操作の階層」それ以降の階層においてもあてはまるとされている。

この間、左右を静かに結ぶ階段が静かな法則性のイメージであり、右半分の力動的なイメージがダイナミックな法則性のイメージ、そしてそれら全体の中で、対称性原理はこれら一連の流れの中で、それぞれがどういう風に役割を果たしているのかを示したものが図3である。

## 5. ふたたび大階層理論との関係で（図2）<sup>30)</sup>

### （1）それぞれの大階層の特徴について<sup>31)</sup>

田中は晩年、それまでの「階層-段階理論」の範疇を超えて胎生期、乳幼児学童期、そしてそれ以降、高齢期に至るまでの3つの時期をそれぞれくくって先に述べたように「大階層」の

提起を行っている。第1大階層、第2大階層、そして第3大階層となるわけであるが、ここにも一つの大切な着目点があるのではと推測している。つまり、第2の大階層つまり乳幼児期を田中は「家庭内宇宙」と表現している<sup>32)</sup>が、個人の系で見ると、それこそそれぞれの子どもあるいはその発達の階層にある人々にとって、もっともその人が個人としてその人らしい時期なのではないかということである。そしてその大階層の中での第2の階層から第3の階層への移行期にはやはり発達の破れが生じているのではないかと予感させるものである。

第1の大階層は「母体内宇宙」と田中は表現している。筆者は〈生理的パターンの創出〉<sup>33)</sup>の時期とし表現している。母胎内である以上、母体と〈密着〉した関係であり、〈間接的な自由〉は存在し得ない。姿勢を変えることくらいであろうか。あるいは感覚器官で外界の刺激を受け止めることが最大の外界との交流の手段となりえているのではないかということである。そして当然のことであるが、母胎内宇宙には限界があり、やがて発達力は母胎内にあるという〈密着〉した関係を桎梏として出産を呼び起こす。このとき、すでに獲得しているものとして、「感覚の自由（受動的であるけれども）、活動の自由（反射に制御されているが）、そして代謝の自由」である。この3つの自由をもって「母胎内宇宙」から外界へと生活の場を移すわけである。いわば胎生期は自らの意思で動くこともできない、〈密着に満ちた時期〉であり、大階層でいうところの〈密着〉の大階層であるということができる。

第2の大階層は、主には個人の発達の系で触れられる側面である。筆者はこの大階層を〈具体的パターンの創出〉の時期として表現している。この大階層では外界と初めて接することにより、個人としても自我が誕生し拡大し充実し

そして他者の自我を認めるという過程を経ることとなる。田中の表現では「家庭内宇宙」とされているが、果たしてそうかは疑問であるが、個人としての完成を見るに至る時期であり、人生の3つの大階層の中で、自らが個人の系としての個人として最も個性を発揮する時期ともいえる。

第3の大階層は、いうまでもなく「社会内宇宙」の時期である。筆者は〈抽象的パターンの創出〉の時期として表現しているが、自らのありようを客観的に見ざるを得ない時期であり、ある意味、集団の中で充実し、また逆に集団の中で孤立したり、自分の生き方への問いに悩む時期もでもある。自らの生き方を問う時期であるという意味で〈対象化〉の時期であるともいえる。

つまり、「大階層－階層－段階理論」においても、各々3つの段階や階層があり、それぞれの階層は単に量的に1, 2, 3と増えるというのではなく、2を中心にその人らしさを表現することができるそして、そのことがいまだ十分できていない時期が1であり、その人らしさをその人自身が集団や社会の中で自覚することができるのが、つまり〈客観化対象化〉することができるのが3の時期であるというのが、田中の言う「大階層－階層－段階理論」であるといえる。

そしてそれぞれの移行期、つまり、胎生期から乳幼児期への移行期には、その人個人としての個性の伸長のための条件が整えられ、その次の大階層への準備としての源泉の吸収のための条件が整えられるわけである。そして第2の大階層において充実し、その大階層では十分発揮できない発達の力量を開放するために、第3の大階層への発達の原動力が生成されるわけである。

## (2) 抽出可逆操作以降の新しい交流の手段の特徴づけと命名について

なお、大階層にかかわる図において、新しい交流の手段については、残念なことに田中自身はそれに触れることなく没してしまった。筆者はあえて、〈正義の原則〉、〈真理の原則〉を「抽出可逆操作の階層」、「創出可逆操作の階層」に位置付けてみた。「抽出可逆操作の階層」は、思春期、青年期を想定させる内容を持つ時期である。この時期は正義と不正義の間で揺れ動く時期ともいえる。自分自身にも正しいこと間違っていることもあるが、おとなにも同じように不正義なことがあるということに気づき、おとなへの反発という形で現れることも多々ある。ゆえに、〈正義の原則〉を交流の手段の中心においてみた。

また、「創出可逆操作の階層」にあっては、田中が「真実和解方式」<sup>34)</sup>を晩年、紹介している。これは、どちらが正しいかということでの争いを克服するためあるいは、それまでの争いを抜け出すために、それぞれがどういう立場で何を正義としていたかを客観化し、過去を総括し、その中からお互いの価値観を認め合いつつ、真理はどこにあるのかを共に共有するという高い次元の和解である。例えば、実践現場においては絶えず何が正しい方法なのかということでの葛藤や争いは起こるものである。しかし、事実を客観的にとらえ、何が真実なのかという土台に立って語り合うことで、争いは影を薄め、お互いが冷静になることができるという事実がある。よって、この階層における交流の手段について、〈真理の原則〉という言葉がふさわしいと考えた。ただ、それぞれは筆者の経験則から導き出した語法でもあり、本来は何が交流の手段とすべきなのかは宿題として残されているし、ご意見もいただきつつ共に考えていただきたいと思っている。

以上、いろいろと述べてきたが、この意味で、「大階層－階層－段階理論」においても、対称性原理は生き生きと表現することができるのだということはよくわかっていたかと思う。

## 6. おわりに

我が家のことではあるが、筆者に様々なことを乳児期に教えてくれたわが子が9歳となった。発達的には幼児期から学童期への移行の時期でもある。最近のことであるが、妻が筆者に、その子どもが神経質になってきている。なんでも「～していい？」と不安そうに聞いてくるということを言い始めた。妻としてはわが子が神経症にでもなったのではと気が気でないという訴えであったが、筆者としてはむしろ、「家庭内宇宙」から「社会的宇宙」へと移行する時期にあたり、それまで100パーセント〈正しい物差し〉であった親の言うことが実際に本当なのか、そういう疑問が生まれ始め、自らが自らの物差しを持つようとしているものがきにも似た姿ではないかと内心、その新しい姿の誕生に喜びさえ感じている。この先、親の言うことがすべてではなく、自分で決めなくてはならないことも多々あるのだということを感じ始めているのだと解釈した。いかがであろうか。同じように、実践現場においても、3次元可逆操作を獲得したなかまは、わざと、困らせる、しかも社会的な関係で、そういうことをすることが見られる。これも、自分自身が、何が正しいのかという物差しを求めている姿としてみれば、なかまの自己選択をしっかりと保障しなくてはならない大切な時期に来たのだと、職員の中でも共有できるということもある。

このように、対称性原理は子どもをめぐることは、「静かな法則性」「ダイナミックな法則性」

の、より深部に位置し、十分な意識がないとみることができないが、じつは、表面に現れている活動そのものからとらえることのできるものであるということもできよう。

田中の理論自体、いまだに未定稿の部分があると考えて間違いはないと考えている。しかし、現代の我が国の発達心理学研究におけるグランドセオリーとして多くの発達心理学研究者が注目してその影響を受けたものも多い。また、田中の研究姿勢、実践姿勢として重要なことは、現場から離れた研究はないということである。そのため多くの発表や講演は常に現場を意識したものとなっている。がゆえに、田中の理論を学ぶにあたり、一助となるべく作図を意図した筆者の思いはそこにあると考えていただきたいし、拙図の不足については大いに指摘願いたいと考えている。ただ、田中の理論をそのまま学びそのままにしておくことは田中自身望んではいない。実践的にも理論的にも大いに手を加え変化を持たせることが必要な理論でもあると考えている。つまり田中の理論の解釈については大いに議論し、真理真実に基づいた深め方をするを田中自身求めていたに違いないと考えている。

拙図を公表したのもそのための一助としたいという願いからである。大いにご批判をいただきたく思っている次第である。

(よしとめ ひでお)

## 謝辞

本研究ノートのもととなったのは、本文でも触れているように、発達保障学校の発達基礎理論コースでの学びが前提となっていることは言うまでもない。難解な田中昌人の著作を丁寧に関わりやすく解説していただいた荒木穂積先生には心より感謝している。また、共に同じコースで学んだ諸氏にも様々な刺激を受け、共に学び合う喜びを感じることができた。本研究ノートは、人間発達研究所の有志でのあつまりである、田中テキスト勉強

会での報告を基礎としている。報告の当日には様々なご批判やご意見をいただいた。重ねてお礼を申し上げます。

#### 註及び図における引用箇所

- 1) 田中は人格の発達の基礎について次のように述べている。「人格の形成にとって重要でない時期というものはないが、発達の各階層のとりわけ第1の発達段階から第2の発達段階へかけては、新しい発達の階層の最初の段階を充実させ、連関と発展の前提としての新しい結合がはじまる」(『理論』p.90)と述べ、その重要性を指摘している。特にこの点について深く触れたのはまさに、「発達における対称性原理について」『理論』第4章である。
- 2) 田中自身の考えでは、自らの理論をあたかも完成したものとして教条的に学ぶということは強く拒否していた。しかし、批判的に読むとしても、あるいは田中の理論を基礎として発展的に発達について考えるにしても、田中の示した理論的イメージを本当に正しく理解しているのかという点については誰もが自問自答しているであろうと考える。
- 3) 田中の大阪保育問題研究所の保育学校における1988年ごろの講演での筆者のメモ。
- 4) 同上。
- 5) 田中の解説を機械的に実践に当てはめて展開することに少なからず違和感を筆者は感じていた。本稿では、もちろん田中の理論において、いついつになったら～ができるとか、田中の示した具体的な実践における方法の解説をするつもりはない。むしろ、そうではなく、その背景にある田中の理論の本質部分についての図式化を目的としている。
- 6) 典型的なものとしては社会福祉基礎構造改革における公的責任を背景とした社会福祉事業の解体と利用契約制度による営利企業の参入の自由化。このころから共同作業所運動で培われてきた「なかま」という表現は否定され、「利用者」という表現が強いられることになった。
- 7) たとえば、荒木美知子(2016年2月の人間発達研究所、田中テキスト勉強会報告)は田中の階層-段階理論の図を初期からの改訂を紹介しているが、絶えず時代とともに階梯が加えられてきたということがよくわかる。
- 8) 田中はまさに膨大な著書を残している。3部作という表現は正しくないかもしれないが、あえて「階層-段階理論」を学ぶにあたってどうしても必要な著作として筆者はこの表現を用いた。
- 9) この点にかかわっては、物理学の概念を駆使したり、歴史的な文献からの摘要も随所にみられるが、浅学な筆者にとって、それら一つ一つの概念を適切にとらえているとは言えないのではないかという不安がある。
- 10) 『科学』pp.152-154.
- 11) 『理論』pp.144-145.
- 12) 『科学』pp.181-190.
- 13) 田中の論ずるところに沿っていえば、正しくはたとえば、「第1段階の可逆操作の成立においては分離-統一している。その可逆操作力を自発的に用いて外界を獲得し、新しい外界を想像しつつ自らの自然(本性)を変えていくのであるが、ここにおける可逆操作様式は並列可逆操作である。並列可逆操作は個別のであり、いわば加算的である。この水準における量的増大は前段階の可逆操作関係よりも大きい。やがて並列可逆操作という様式上の限界が可逆操作力を満足させなくなる。(中略)並列可逆操作様式に主導的位置を与えておいたのでは発達は停滞し、退行をひきおこすばあいさえもあるので、それを否定し、可逆操作力を系列化すると述べている(『科学』p.183)。ただし、『理論』においては例えば「2次元可逆操作の段階から3次元可逆操作の段階への移行期には、2次元可逆操作が並列可逆操作から系列可逆操作へ変わっていく過程で3次元を形成する」(『理論』p.138)と述べているように、並列-系列の関係についての認識も深められ、単純に可逆操作力と可逆操作関係の変数が同じか違うかで並列か系列かが決まるものではないと受け取れる表現をしている。
- 14) 密着、充実、対象化とは、田中の表現ではなく、筆者の「造語」である。筆者なりにこう言った造語を用いて理解しようとしたものである。特に以降、筆者の表現にかかわる用語については〈 〉で示し、田中の用語については「 」で示すこととする。
- 15) 「田中昌人さんにきく—今日における発達保障の理論と課題」(聞き手 加藤直樹、荒木穂積) 障害者問題研究、第31巻第2号(通巻

- 114号). p.7.
- 16) 田中の表現においては新しい発達力の誕生との関連で「外への発達の破れ」は頻繁に出てくるが、「内への発達の破れ」については表現されている箇所は比較的少ない。ただ、原著から引用するにあたり、「対称性の内への発達の破れによって人格の発達の基礎を新たに作る」(『理論』 p.119, p.124 など)と述べているように、内への破れは各階層の第1の発達の段階から第2の発達の段階への移行期における重要な転換点を形成するといえる。ただ、田中は次元可逆操作の階層にあってはこの表現を控えているように思える(『理論』第4章第3節)。内への破れが1回なのか、2回なのかあるいはそれ以上なのか明らかではない。しかし、たとえば次元可逆操作の階層にあっては、筆者はこのうちへの破れが大文字で示すところのI次元形成に結びつくものとして理解している。
- 17) 〈主人公性〉という造語はやや誤解を招く言葉遣いかもしれない。ひとはいずれの時期においても主人公であるということは言うまでもない。ただ、この〈主人公性〉とは、人との関係においてでもあるが、自らの獲得した新しい発達力を自らの手にとって、使いこなすことができるという自らの主人公となるという意味で、この時期独特の様相を表現してみたものである。
- 18) ダイナミクスな法則性と美しき法則性の接点としてこの「外への破れ」は田中の著作にはたびたび出てくる。たとえば、『理論』 p.118では「胎児期の対称性の外への発達の破れによって回転移行胎児期可逆操作力として転倒位の反射対称性において対発生した新しい発達の原動力」と記されているし、また、『理論』 p.120では「生後第1の新しい発達の原動力を連結移行回転可逆操作力として回転対称性において対発生させていくという対称性の外への発達の破れをもたらす」(『理論』 p.125では「次元移行連結可逆操作力を連結対象性において対発生させていくという対称性の外への破れをもたらすことになる」と表現している。
- 19) たとえば、回転可逆操作の階層では「微笑などの新しい交流の手段を伴った生後第1の新しい発達の原動力を連結移行回転可逆操作力として回転対称性において対発生させていく」(『理論』 p.120)と述べているし、連結可逆操作の階層においては「初語などの新しい交流の手段を伴った生後第2の新しい発達の原動力の発生として」(『理論』 p.125)、次元可逆操作の階層にあっては「書きことばに例示される新しい交流の手段を伴った生後第3の新しい発達の原動力が、次元対称性における外への発達の破れとして対発生していく」(『理論』 p.139)というように触れている。
- 20) 可逆操作力や可逆操作関係については折々に区切りがあり、非連続なものとして理解してよいと考えているが、対称性原理にかかわる線は、常に人格の発達の基礎を培いつつ、内面を豊かにする時期と自己客観視する時期が交互に連なって起こっていると理解している。そのため、柔らかく曲がった連続した線として表現した。ただし、その働きについては、本文中にもあるように、白抜き部分と塗りつぶし部分が交互に存在すると理解している。
- 21) 『科学』 p.88.
- 22) 『科学』 p.180.
- 23) この部分については筆者の独自の観点であり、田中自身は言及していないことを断っておきたい。
- 24) 『理論』、第4章第3節 pp.27-140.
- 25) 『科学』 pp.186-187.
- 26) 『科学』第2部第2章第2節 pp.179-186. 『理論』にあっては、並列-系列という機械的な論じ方から代わり、対称性原理とダイナミックな法則性との関係で重なった部分としてより限定的に記されている。 pp.137-138.
- 27) 『理論』 p.139.
- 28) 『理論』 p.139.
- 29) 『理論』 pp.128-137.
- 30) 本稿2では、図2の細部についての説明を行ったが、ここでは全体を俯瞰した形での説明とする。
- 31) 実際には発達の「段階」についての解説の次に「階層」についての説明が不可欠であるが、それを飛び越えて「大階層」にかかわる説明となるのは不自然な感は否めない。ただ、今回は対称性原理を通して人間の生涯発達にかかわる図を試みたために、階層間移行についての解説、階層自体についての解説については今回報告する図にはなく、後日、検討し、報告の機会を持ちたいと考えている。
- 32) 田中は晩年の講演の中で常に「発達の(自由の)宇宙」という表現を盛んに用いていた。



特に大階層の発見以降、大切なキーワードとなっている。この点について荒木穂積は下記のように、簡潔に説明しているので参照されたい（荒木穂積「発達保障の誕生から50年」立命館大学産業社会学部論集，第51巻第1号，2015，p.13）。

「大階層を区別することができるとするのです。そして、1つ目は母体内宇宙。それは生命進化と個体発生をリンクさせて発達につなげることができる宇宙です。2つ目は、生まれてからの乳児期前半・乳児期後半・幼児期の3つの階層をまとめて、人間の進化を発達の中に組み込んでいく時期で、子育ての中での宇宙、家族内宇宙とでもよべる宇宙です。そして最後の3つ目は、社会内宇宙という世界で、文明進化を人間発達に統合する大階層です。この第3番目の大階層は、少年少女期に始まり、青年期、成年期・高齢期全体をおおう宇宙です。」

- 33) ここでいう「パターン」とは、規則性、体系などの意味で使っている。つまり、それぞれの宇宙のありようを体系化して、理解することをさす。
- 34) 田中昌人「平和・安全・発達保障の応用心理学を目指して——2050年迄の応用心理学の前提と課題に関するミレニアム考——」応用心理学研究，27(2)，2001，pp.1-16.

#### 引用及び参考文献

- 荒木穂積「発達保障の誕生から50年」立命館大学産業社会学部論集，第51巻第1号，2015，p.13.
- 座談会「田中昌人さんにきく—今日における発達保障の理論と課題」（聞き手，加藤直樹，荒木穂積）障害者問題研究，第31巻第2号（通巻114号），2003，pp.2-20.
- 田中昌人，田中杉恵『子どもの発達と診断1』大月書店，1981.
- 田中昌人，田中杉恵『子どもの発達と診断2』大月書店，1982.
- 田中昌人，田中杉恵『子どもの発達と診断3』大月書店，1984.
- 田中昌人，田中杉恵『子どもの発達と診断4』大月書店，1986.
- 田中昌人，田中杉恵『子どもの発達と診断5』大月書店，1988.
- 田中昌人『人間発達の科学』青木書店，1980.
- 田中昌人『人間発達の理論』青木書店，1987.
- 田中昌人「平和・安全・発達保障の応用心理学を目指して——2050年迄の応用心理学の前提と課題に関するミレニアム考——」応用心理学研究，27（2），2001，pp.1-16.